

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	関口貴美子 (せきぐちきみこ)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修士生は卒業・修了年月も記載)	早稲田大学大学院人間科学研究科 修士課程 1 年
発表年月 または事業開催年月	2021 年 8 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	第 29 回日本介護福祉学会大会
発表者(※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	関口貴美子、扇原淳、加瀬裕子
発表題目(※学会発表の場合のみ記載)	女性介護者が担う多重介護の実態と支援課題に関する研究
<p>発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)</p> <p>【背景・目的】介護保険制度は、介護の社会化を図ることを最大の目的としているが、在宅介護の場合、家族介護を前提として営まれているのが現状である。家族構造の変化と家族機能の衰退により、家族が担う介護の形も多様かつ複雑化している。特に多重介護の場合、1 人で複数の被介護者を同時に介護する家族の負担は大きく、介護者支援の必要性が言われるものの、その実態は十分知られていない。国内の先行研究を整理すると、多重介護に関する対象文献 5 編のうち、介護と育児を行うダブルケアが 4 編、他 1 編は複数同時介護 (両親) の事例を扱っていたが、地域包括支援センター職員の立場から支援の困難性を示したものであった。そこで本研究では、女性介護者が担う多重介護に注目し、介護当事者の立場からその実態と支援課題を明らかにすることを目的とした。</p> <p>【対象・方法】現在かつ過去において、在宅で 2 人以上の親あるいは家族を 1 人で同時に介護する経験を持つ女性多重介護者を対象とした。対象者の募集にあたっては居宅介護支援専門員に協力を依頼し、2 人を紹介されたのち、さらに 2 人から紹介を得た 2 人の合計 4 人とした。2020 年 8 月から 9 月にインタビューガイドを用いた半構造化面接を実施、インタビュー内容は対象者の同意を得て録音し、個人情報を匿名化して逐語録を作成した。収集データから多重介護者の経験を可視化するために、複線経路・等至性モデルを用いた分析を行った。</p> <p>【結果・考察】分析の結果、多重介護という個々の経験から【多重介護が終わる】という等至点に収束するまでの 4 名の経路を TEM 図として可視化できた。多重介護の引き受けには【家族としての義務・愛情】が作用していた。【家族としての義務・愛情】は介護終盤の施設入所決断時にも葛藤となり現れていた。仕事・家事・介護の並行過程では【介護サービスの利用】が多重介護の負担軽減に役立っていた。一方、【家族の不理解・非協力】は就労介護者の生活や仕事への負担を増大させ、その負担軽減のための【仕事を辞める】選択が、かえって介護と家計負担を加重させていることが示唆された。介護者が家族としての愛情を保ちながら介護ができるような社会的支援が求められる。就労介護者にとって家族のサポートは重要であるが (内藤・他 2002) それを得られない場合は一層ケアマネージャーの介護者理解と介護者支援が重要になる。離職防止のためには介護休暇等への職場の理解が必要である。加えて、地域包括支援センターと市町村とが連携して介護者の健康への配慮や経済的な支援を制度として構築することが望まれる。国内では多重介護に関する研究は希少であり、多重介護者の存在の周知と負担軽減ができる方法の検討等、更なる研究が必要になる。</p>	

※無断転載禁止